
カラクラリ。夕暮れ暮れる

白紙描写

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カラクラリ。夕暮れ暮れる

【Nコード】

N7033W

【作者名】

白紙描写

【あらすじ】

高校の観手は、みてみれば、全然、寂しい人生ではなかった、を描いた。物々しく荒々しい物語ーと

カラクラリー1 (前書き)

これまでの法則を打ち破る、それ

カラクラリ1

バイオレンスな日常に、憧れていたわけではない。

ただし、それは、平凡な生活に人生としての生命力を費やすことでも、ただ、何気に面白い可笑しく生きてみたいだけの話だったのだ。

僕は、観^{ミユ}手上的名は、白州^{シラスガワ}川。

繋げて、白州川 観手。

生意気な子供達が戯れ、後に行く。
どうせ、僕がその後、越して、子供等の無邪気な声は、どこか遠くに、消えてしまうのだ。

「あーあ、お空がとっても、オレンジだ」
今日も1日の終わり。何か物足りなさ覚えながら、一步一步、帰宅路を踏みしめる…
何か起きて欲しい。けれど、今のままが良い、と言うのは、やはり、贅沢な妄想に過ぎないのである。

想像力とは、単なる1次元の細波に過ぎないことは確かだ。

意味もなく。有り得ない理想の空虚。けれど、人はそれでしか生きていけないのだ。

ああなればいいは、ああすれば良いに変わる。偏屈なものさ、

あれ？結構、夕暮れの光景は眩しいな。

河川敷の隣の隣りのそれまた隣の隣の敷地に、僕の僕自身の家族の家がある。

「ハイパー帰宅学生とは、僕のことさ」

独り呟くのは、等しく寂しい。

この物語は、厚き友情と眩いばかりの個性的人々と莫大的なギミツクな物語

「

カラクラリ2 (前書き)

本格的な小説は、僕には、無理かもしれない

カラクラリ2

土曜日

今日はうつかり、学校へ行く支度を整え、私宅から学校へ向かう。ちよつと前までのとこれまで、来てしまったところだ。

今日は、土曜日でそれ以外の何者でもないのだ。現に、それ以外の平日で無理して、独りで学校へ行く準備をしたのが運の尽きだった。

玄関前で妹の月日ケイカに、

「え！？もしかして、お兄ちゃん、学校とか行こうとか、してるの？」

そ！

僕個人、オツとイケね。昔は、土曜日も登校していたんだぜ、昔の人は…とは紡げない僕の内心小心ゴゴロは、次の言葉を口にした…

「ああ、行こうとしていた所さ」

とは、言ったつもりはサラッさららない。けれど、どうやら、そんな事を口に走ってしまった様子だ。

「げげ、靴下たごまつてるし、寝癖が愚か者に成ってるし、ちゃんと、身なりは、キチンとしないと、だめだよ」

「ああ、悪い」

しょうがない表情を醸しだし、寝癖を治す妹

は、今日も学校か、ダルいな、とか思いつつ、実は今日は、学校に

行かなくても良いのだ。はは、妹よ、寝癖を直したところで、このあと、亜、しまった。今日は土曜日だ。とか言って、妹を翻弄させてやる。

「てか、今日土曜日じゃん、どこ行くの？」

と妹

「はは、僕が学校にでも行くともも思っただのか？そうさ、学校に行こうとしたのさ。俺は悪くねー、俺の頭が悪いんだ！」

確かに、うそは言っていない。学校と名の付いた建築物での僕の社会的知能指数は、笑いを隠しきれない数値だ。

友達も指折りの数で収まり！

それでいて、友達と言える代物でもない人たちだ！

僕下僕！

その名が僕の真名に、等しい！いや、きっとそうだ。そうだったに違いない！

「あの大丈夫？」

ほら観ろ。僕をさげすんだ眼差しを、玄関前と名の知られた舞台上で、僕を禍々と神々しく見つめているではないか。

そろそろ、妹は、まるでこの世の者とは、思えない物を観るような眼で、『病院行ったら？』とか、ほざくんだぜ。あー、今なら、僕の家庭のリモコンの数字キーがどうして、ああ、にも、黄ばみやす

いのだろつと、普通鬱になつちやう出来事も軽く『青春の汗がにじみ出ているのさつて、威風堂々と清々と言葉で仄めかせるぜ。』

「あれ？妹は？」

どうやら、観たまんまフリーズして、まねきんのようにならない僕を見て、どこかへ言ってしまったのであるつ…

「さて、どうするか…」

僕はまた一人、行くはずもない学校の制服を着飾つて、つつたつて居るばかりであった…

カラクマリ3（前書き）

ようこそ、皆知る由もない白紙描写です。実を言うと、自分書いた作品は、一度観や読み直しはしません主義趣向で切り抜いています

カラクラリ3

土曜日（綺）

どりあえず、何しようか…

一人孤独と虚登校を不登校したのだ。僕は立派な虚不登校児と化してしまったと実感する…

て、何をどこまで引つ張ってんだ？僕？

語彙が乱舞してるって、

僕白州川は、一人部屋を確保済みでいて、家の中に、存在するマイルームは、とても、心地が良く、開放的な二枚窓、それともなって安らぎを奏でるカラス達。彼らは、電信柱に戯れ群れている

世の中は、とても巧妙に、出来ていて、とてつもなく、斬新だ。

僕は、一人哲学的な事を考え続け、ついに見つけた、一つの答えを…

「暇だな〜」

暇は哲学的の元素と言つべきであろう

「痛い」！

なんと、これは、驚くべき境遇だろうか…

強かなる物体が、顔面に強打したのだ…

誠に、痛い刺激が何ら普通の顔に走ったのだ。

「いてて、何だよ」

物理的痛みにこらえながら、墜落事故の物を確かめる…

「紙か…」

言葉の通り、紙が束に纏まった物があり、それを人は、本と呼ぶ。

「独り言とか、しない主義なんだ」

と言いつつ、本を手手に持つ。

「…」

しっかりと、目を凝らすともわかる。

それは、取り扱い説明書だ。しかも高圧的な厚みのある。重量感たつぷりの奴。

僕は目でじっと、凝視する。

ハジかしめの表情もしない本。

重力に従い。定量なまま本は微動だにしない。

じっと懲らしめ、疎く咎められるであろうその視線を阿鼻に浴びせしかめる。

「よし、観山設定だ」

何かを心の内なる者に、項を刻む。

「今日は取り扱い説明書と遊んでやるよ」

「

カラクマリ3 (後書き)

物事を考えるのがこんなにも、難しいなんて、思っても観なかった
…この世の理は誰が知るのだろうか…

カラクラリ4（前書き）

語彙を乱舞させたい

カラクラリ4

土曜日（祈）

ふは。翻弄して語らってやるぜ

目次を黙示録して、堪能に心も体も、愉快色に染めてやるぜ。

「ん？文字がかかれてっぞ」

それは、取り扱いの際のご注意だそうだ。

「なんだあ？、そりゃ、取り扱い説明書だからって、取り扱い説明書の取り扱いの注意なしではやっていけないようにも見えて仕方なさげ……」

言葉数を並べる前に、回覧してみよう

そこには

当本では、もしもの事があったための責任はとりません。当本を使用して、人に危害を与えるような所為は、止めて欲しいとご領収ください。当本は本当に本です。

「かい、見えるな」

納得のいかない。分厚さも領けそうな文字文字に見える。

「先ほどの激痛も大目に見てやるか……」

僕は、ちよつと前のこの本に対する憤りを赦すことにした。

「むー」

手始めに、どりあえず、一ページ眼をめくると、興味深く興を弾く一面がそこにはあった。

「真の理か…」

眩く裸眼も一時停止。

一面には、こんなことが記されていた

一、世界の建築の仕方。

二、世界の経路の伝達。

三、世界参考

「どこの宗教でもって、ここまで言い切れる善導方は観たことがない…するとこれは、新手の介入か…とか、言っちゃって」

僕は思った。こんな小回りの効かない文字を堂々と打てる輩に、正道な事柄はないと…

とか思いつつ、馬鹿にもした物腰で数ページまくる。

「珍妙だ」

幾何学とは。算数の末端の象徴。

けれど、こんな使い方していいのだろうか…

眼にも疑うそれは、4ページ目の だった…

○

「錬成陣にしても、たちが悪い。完成度良いとして、弱酸性のセン
スだ…」

何が伝えたいかというと、小学生が如何にもノートの隅に描きそつ
なデザイン…と云いたいのだ。

「

カラクラリ4（後書き）

完成度はコッシヨシヨウシヨウ

カラクラリス（前書き）

ここまで読んでくれると助かります。後これは白紙描写の貪欲な頼みで、どうか、感想送ってください。

カラクラリ5

土曜日（企）

何かの暗号なら、意味深なのだけれど、これは、どう観ても、落書きだろうなー

「と思った。」

視界に写り込む未確認円陣は。観なかったことにした…

畳仕立ての床は肌触りがよく、半永久的に、うつむけや仰向けまで幅広く横になれそうだ。

えーと、そうだな、ノープランに勢いで書いた小説はここまで限界って感じだな。ネタがない。

「お、好奇心をそそる」

『友達の作り方』

「今の僕には、サブキャラとヒロインとペットと悪役が必要不可欠最優先事項だからな。この一部を読破って観るか…」

「18ページと家から十六行目に間気間気と記された『友達の作り方』を読むことにした僕…」

お友達ごっこは、有限です。ちゃんと計画を立て、より良く効率よく扱きましょう

「ちょ、待ったまえ、堂々と有限って、言っちゃてくれちゃて、良いの!？」

僕は、自分の良心を再確認した…

やっぱ僕は善人偽善者であるな、まだまだ、腐っていないぜ

「ふん、忌まわしい本だ。」

そつと、畳の上に置き

アグラを掛けていた状態 立つ
の状態に立て直し。

昨日の夜間に、残っていたポテチを勉強機の引き出しから、引き出す。

ちなみに、物々しい教材はちゃんと、本棚に収納する性癖がある為、左右対称を意識しながら、本棚に収納している。

ちなみに、勉強機の表面は、埃まみれだ…

と、

ポテチを携たすえた僕は、先ほど、アグラを掛かけて、滞ひどっておった定置ちやうちに、着陸する。

「むふ、脂ぎった手腕で、忌まわしめの書（謎の取り扱い説明書）をギトギトにホフってやんよ」

軋む。開封済みノンフライポテトの袋…

「

カラクラリス（後書き）

いつか、馬鹿にされるその日まで諦められぬ、夢を追いかけて、かけ
続けたい…

カラクラリ6 (前書き)

朧気な夕日を塗り替えたい

カラクラリ6

土曜日（岐）

健全たる僕の心当たる限り、初な悪行を、行つ志だ。

本を使用不可にまで、ギトギトにすんだぜ。紳士が観たら、どん引きどころじゃ〜気がすまね〜だろうよ。

はは、善人たる僕の白紙に、今、新たな背徳邪道非道道程を小刻むことに、なるであろう。進むであろう。

ふふ、僕は悪意よ。自分に向ける憎悪が天元突破しそうだ：脳みそ、沸騰して吹っ飛びそうだ。けけ、誰も、この部屋の王である、この僕を抑制させ、静止する動向は、出来ない！

だって、僕、友達いないもん。

「まずは、一枚…食らう」

ザリッ

観手は、抜かりなく、手際よく、適度にポテチを食べに食べる

一枚…そして、一枚…さらに、一枚…あれ？ギトらない！？

「しくじった！…！」

そう、抜かりがでたのだ。綻びと底知れぬ、劣等感が上昇乗馬する。僕のコメカミに…

「前の5話で、ノンフライって、書いて合ったじゃないか！どこまで引つ張ってんだ！僕は！僕の馬鹿！」馬鹿阿呆

ドスドスと、畳仕立て床、に、叩きつけるばかりである。

ドスドス

ドスド

ドス

ド

…

時すでに、数分後。

余程、頭部を打ち付けていたのであろう。カッコ良く血がにじみ出ている…

思だした…

そんな静まり返った部屋で、人一人、沈黙に沈む…

あの頃

あの日は、いつだった、だろうか？

僕を取り巻く。

楔くさびがわぬらお瓦尾竿

ひよつとしたら、奴がいたからこそ、今、健在するのもかもしれぬ…

中学生

一番、バカみたいに弾け暴れる学だろう。小学生までの僕は、友達らしき人が居たのかもしれない。断定は出来ない。判断しかねない。そこまでしか覚えていない。

しかし、これだけは、どうしても確実だ。

中学生になって、僕は再起不能の墮落、低劣愚劣、と落ちぶれてしまったんだ…

「ジョイナン！（遊ぼう！）」

楔瓦は、初対面々と僕を観て、開口一番、そう放った。

最悪の選ばれし者誕生だ 僕

誰だって、最初はギクシャクして、優しく気を使ってくれるモノだ。楔瓦。

もしかしたら、親友かもしれない。

愚かな思想の献上

邪険が選ばれし者を貪る

初めては、中学入学祝いに買って貰った携帯電話だ。薄型が評判だと、噂の造形の携電は、無惨にも、二台水に沈められた…

「気にすんなって」

心なしか、無責任な言葉が飛び交う。

防水携帯に変えれば、ぱっくり、思わぬ方向に、画面が曲がり。
親に、反抗した。

「僕に携帯を押しつけんな！どうせ、僕を束縛したいだけなんだから！！！！嘲笑しやがって、」

その日、意味もなく三日間学校を休んだ…

カラクマリ6 (後書き)

楔瓦が登場しました

カラクラリッ (前書き)

ポチる喜び

カラクラリフ

土曜日（来）

と、

回想を繰り広げ、意識を現世に、舞い戻ってきた。

取扱中説明書は、転覆し、八の字の強化版のようになっている…

楔瓦のとは忘れるに越したことはないか…

取扱中説明書を拾い上げる観手

一見すれば、のび太の部屋にも見えるこの部屋は、明らかに片寄り
がたい配置で、扇風機とダンボールが積み重ねられているだけの一人部屋
なのだ…

スペースは十分必要以上に、ありありだ。

なおも、言うのなら時間もスペースだらけ…

「友達か…」

もう一度、忌まわしい本に目を通す。

生きていく中で絶対的な生け贄、もしくは、下部部下として、使えます。

「言葉の適度を知らないなあ」

再確認しても、結果は忌回し本に代わりはないことになった。

どりあえず、公園に行く事が大事

「なるほど、公園から友達を厳選するのか…」

評価が一段階向上した。

「居いつてみる価値は大いに、ありが、だが、駄菓子歌詞、このよ
うな需要素直な商人が進めるパンフレットのようなものに、書かれ
出す、文字文字を信じて用のだろうか…」

迷うと、それこそ、この本の呪いに掛けられた様な気がするので、
模範に実行に移す事に決めた…

カラクラリッ（後書き）

ポチる快感

カラクラリ8（前書き）

次世代のシンポジウムを切り開くのは、険しき難儀な作業の積み重ねが最重要なのだよ

カラクラリ8

土曜日（公園）

言葉一つでテロリスト。

よく聞く話だ。土曜日の公園は、色とりどりの色彩と選り取り見取り、手取り羽鳥と間取り吼え過ぎり犬犬と、子供達のカードゲームを、ベンチにパンチしながら眺めるのである。

配置に設置される高原色で単調な滑り台は、子供達に最適な高台へと、変貌している。

僕の牧場ってやつだろ。

糞で素朴な様子に捉えられる僕。

いかがわしく観るのなら、一人寂しく子供達を眺めて、偏屈笑みを浮かべているようにしか見えない。

が、これは微笑んでいるのだ。

自己判断だけで収めるだけの話だ。

「コーヒー飲みたいな〜」

じゃんぞやら。

「百五円か〜」

この不況の時代、百円だけじゃあ。自販機でミネラルウォーターー

つ買えやしない。

しょうがなく、仕方なさに、お近くのコンビニにでも行く事にした…

時は、10時すぎ。

最近のコンビニは、二十四時間営業していると言っから、まか不思議。

「テクテク」

立ち歩きで、しかも、両手で例の本を睨みながら、駆け出す。

まず、女性のお友達を設定したいのなら、この本を読み歩きすること…

そう上手く行くのか？

この文に、意味することを直訳するとしたら、よそ見歩行者を続けて、女性の女体に直接的攻撃するって企てって事なのだろうけど。明らかがましい…

元々、説得力の断片もない本の事なんて当てにしたって…

「わっ！」

「キャ、」

どうん、

キヤ？今、キヤって言わなかったか？

あり得ないか？

そんな言葉生まれて初めて、自前の聞き取っぜ。

基本的貧弱な僕は、体重移動を謝って、側転気味に、大転倒する。

…

血！血が出る！

なんだか異常なほど。出血してるよ。パパ、ママ！痛い！痛いよ。

とは、言えるはずもない…

「あなた、男の子の癖に、凄く情けない呻き声をうぶくのね」

でた！そんな事を言ってくる！人。絶対存在しないから！逮捕だ！
逮捕！

こうして、その後、頭腹かしらへくはら幾月いくげつと仲良くなったのだ…

カラクマリ⑧（後書き）

頭と書いて、つもりと読む日本語がおかしい（笑笑）

カラクマリ9（前書き）

いろいろと完成度が悪くすみません

カラクラリ9

土曜日（麒麟）

頭腹は、実際の所、小学生の時から、ずっと、同じクラスだったらしい。

「気づく方がおかしいだろ。おれ、女の子とお喋りしたことや遊んだり、したことないし、それに、顔すらろくに直視したことなんかないんだぜ。」

いつも、お外にでるときは、いつだって、長ズボンな僕は、今回はかしは、長ズボンの有能所為に再度、諭された。

出血は、長ズボンのおかげで、小規模な被害で収拾した。

膝がぱっくりピザのように、血まみれ破れているが、問題なく大丈夫だ。

なぜだか知らぬが、頭原はそんなの大丈夫、大常備してあると、言わんばかりに、包帯を懐から取り出し、応急処置をほどこしたのだ。

「そんな、施さなくても良かったのに……」
情けない声を出すのは、僕の方で。

心なしか、こんな事になるとは、夢でしか見たことないと、殆どの人が思っているであろう。

するとだ。頭腹という、謝って頭原と誤変換したり、とうふくとか呼んだりしそうな頭腹が。

「さつき、落とした秘伝文書を勝手に、拝見して観ただけ…見解するなら、実に興味深かったわ」

「な、何だよ。その、お、おかしな、おかしなモノを見物するよう
な、まな、眼差しは！」

自分でも、目が泳いでいるのが予測できた。

いつもながら、ベンチに座っているのだが今日はなんだか落ち着かない。

ちよつと、さつき、一度ぶつかった彼女と、缶コーヒーを買って、公園内に無造作設置された僕専用ベンチ向かう途中に、また、ぼったり、会ってしまったのだから、定めとばかりに。

二人で腰掛ける形になってしまったのだ。

説明の仕方もがちがちだ…

「当たり前なことを、言うのですね。あなたは、変な人で決まりじやない」

当たり前のように、言うのが恐ろしい…

「と、どりあえず、本を渡しに来てくれたことだけは、助かったよ…
そ、そう言えば、頭腹さんは、何か用事でもあったんじゃないの？
有るのなら、それを優先すべきだ。」

どりあえず、ぎこちないこの空気は、僕の性と柄に合わない。それに、つなげて言うのなら、この取扱中説明書は、デスノウト並みの力が有るのはたしだと判断した。

「無理ね。だって、幼なじみだもん」

と頭腹が言う

カラクラーリ9（後書き）

読み直し等はあまりしない主義なので、仕方ないです

カラクラリ10(前書き)

勢いで書いた

カラクラリ10

土曜日（旗）

善人へのイメージ容姿を持たない。ちよつとした願いだ。

それを偽善と言うのなら、偽悪だって、有っても良いじゃないか。

自己集中心の人格がいれば、他志願誘導系人格も居ても良いじゃないか。

「ん？何か、言葉おかしい点がなかったか？」
もう一度、言っただらんよ。

「正直に正確に言うと、幼なじみらしい関係になりたいの…」

おっと、つつこみたい点がいくつか有るよ。これは突っ込むべきなのか？

「関係？んな、馬鹿な話があるかよ、目を覚ませ、ここは現実だ。他次元とは違つぞ、弁えろ。」

ここは面と向かつて、相手の思惑や企てをさらけ出さなくては…
そうあっさり、信じられない偽善者なのだ。

「また、おかしい事を言うのね。ここは一次元よ」

断定できるのか？！

いやいや、僕が二度目の相対の体当たりをしたシーンでの携えてい

た缶コーヒーが若干、Tシャツに付着している方がもっと気になる。

「もっと、的確に正確に言うのなら…」

「文字よ。」

「言っちゃったよ、この人！」

確かに、領けんとばかりに僕たちは、二進数でも、存在して行けそう。文字文字だ。断定工程の沙汰ではない。

「現に、今までのあなたは、トリガーが作動していたの。」

…その、全ての理と言うべき物がこの忌まわしめの書、略称（忌書）いしょ、よ、ネタバレね」

「ネタバレ？」

あ。なるほど、普通この本は、現段階で知るべき、モノではないと言いたいのだな。

「証拠は？」

「ない」

えっ、即言即答？

「無いの？」

「ないです」

ベンチが軋む。お空は青真っ盛り。

「信じるか、信じないかは、あなた次第って事？」

「前提を肯定するわ」

ヒロインは、凄まじい日本語を言い出すな。

けど、けども、僕はこんな毎日が変わればいいのに、とか思った時点で。こっち側だったのか。

本来否定すべ事が否定できない比定すら出来ない。

あー、まどろっこしい。マジで、生きてるって感じだ。

「ちょっと、だけ、頭をベンチに打ちつけて良い？」

バカな発言だ。

カラクラリ10 (後書き)

誤字が多いかもしれないし、文法もおかしいかもしれないが仕方ないですよね

カラクラリ11(前書き)

可笑しいな所が有ったら、申しわからない

カラクラリ11

土曜日（毅）

「うん、良いわよ」

律儀に、少しそこ側に寄って、頭部を打ちつけ易くするための空間を作ったのだ。

「じゃあ、遠慮なく」

てっ、いつの間にか、気軽に言ったはずの言動が進行しちゃてるよ、ま、いいか…

ひとまず、打ちつけることに、自信を取ることにしよう

めいっばい、ベンチの硬質で鋭利な所に、頭蓋骨の前頭野に当たるところを打ちつける…

ガンガン

がんがん…

「頭をベンチに打ちつける、意味が分からないわ。」

ガンガン、

「はは、知らねーのかよ、（ガンガン）
肯、すつとな、v pが上昇すんだよ。（ドカドカ）」

自分でも、羞恥心が際立つて、来るぜ。周りを済ませば、子供達がいびつ目線を送信を信仰する

「よく意味が分からないに、越したことがないわ」

紙パックのミルクティーを両手で包むように保ち、飲むのだ。こいつ、髪の毛長いくせに、紙パックの持ち方が危ういな。

「はー、良い感じがする、てか、ハイになったぜ……」

額は血まみれ塗れ、ガクツと、ベンチにもたれかかり、両手手腕を後方へ放り出す。

「ただの変体ね…変質者と言うべきかしら……」

それにしても、ミルクティーを飲み干すのが、遅いなこの人、いっそ、僕が飲むのを手伝ってあげようかと、迷う所だな。

「どうせ、男性なんて、変人ばっかだ、僕のお父さん一人を観たら、ドン引きどころか、天涯に生きたくなくて、他界したくなるぜ。」

言っている通りだ。まかり通すなら、世間の風上にも、置けないし、親としての傍らにも、設けられない。

「大変なのね……」

大変なのは、みんな一緒さ、とは、口が裂けても言えない。断定は

出来んが…

「あれ？いま、大変と変体をかけた？」

疑問符で攻撃する。

「このミルクティー。味が濃いわ…」

無効化された。

とかなんとかで、正午に差し掛かろうとしている時間帯だ。子供達はこつ然と姿を消し始めた。

ん？

「話を戻すけど。頭腹は、ずっと、同じクラス立っただっけ？」

なんか、可笑しい引っかかる。今日この日、単純に今日初めて会った。

としか、思えない。

なぜなら、学校で、よりによって、同じクラスで見かけたことも、聞いたこともない感じだ。

あやふやで朦朧な記憶力を前提とした、仮説だが、

「そんな物よ…」

そんなもの？

「意識していなければ、空気と同じって事、

…

私があなたに言える言葉はそれだけ……」

取扱中説明書の49ページ

この世は、ゲーム

皆さんは、プレイヤーでただの駒です。プレイヤーで駒と言う立場を上手く利用して、上質で完成度の高いドラマを演出してください。消滅しても再度、プレイしたとき、初期設定が有効になる事も有ります。

カラクリリ11(後書き)

イかれた場面があつて、申しわかない

カラクラリ12(前書き)

クレイジーきわまらない

カラクラリ12

土曜日（槻）

嫌いな事が得意になることって、あるよね。

私にとって、あいつは関係ない人材でした。名前は知っていても、好めない感じでした。まるで、ただ機能している歯車、でもなく、本当に意味がアルの分からないネジ。私の視界には、映写していません。あいつには、友達がいないの？あはは、愚かで哀れね…と、思想に抱く私も立場を弁えていなかった。私も知り合いは居ても、友達だと思われても、私個人は、まるで、お友達だった。そうだわ、名前を覚えてるって事はただ事ではないじゃない？そうよ。そうね。運命ね。

…

「おい、頭腹！すごい児童がいるぞ」

額に血痕が付着しているのは、ハイ有る印の僕観手だ。

「一見外見年齢、12歳ね。恐らく小学生。」

公園の砂浜に、何やら、何やら、何々か、切磋巧みに、樹木の棒を走らせているのが伺える。どうやら、小学生が算数をしているらしい。

隣では、もはや、チンパンジーと化した、興奮状態全開の観手。

「遊んできたら？」

「ふん、下らぬ。小学生と戯れるなんざ、あり得ぬな。」

膝がぱっくり開いた長ズボンのポケットに、手を挿入して、歩き出す。

「だが、あれは…異常だ」

カラクマリ12(後書き)

等間隔に

カラクラリ13

土曜日(棄)

兎も角、ぎこちなく整わない足取りで、およそ、小学生とも見える子供の元へ、より、付近に一時的、留まることにした、理由は行動を把握するためである…

するとだ。今目に映る子供は、すらすら擬音を使って、方程式を解き続けるではないか。

僕、観手は驚きを晒し退く事も出来ずに、珍しい素顔を浮かべてしまったのだ。

「兄さん、異様な表情をしていますよ？それも、僕を誘拐しそうな物腰で…」

その言葉に、慌てて我に戻る僕、観手は似を表すなら日本妖怪塗り壁のような、結構滑稽体制をかたどっていた。

吟味する、このお子さんをどうにか、落ち着かせる為、額の血を拭いて…

「失礼、これは妖艶な姿勢を見せてしまった、ところで君は一体、何を刻んで記して道楽ってるの？」

語尾が軟弱だか。我ながらに、良い言葉遣いで日本語も完璧だ。

「観手も分からないのですか？アナタは、怖いほど。頭が疎いです

ね。笑っちゃいます」

こ、この子供、腹立たしいしく、疎ましい。決めた。こいつは、童貞ちゃんだ。

我ながら、小学生学生のあだ名とは、思うまい。うへへ、最低で底辺地味だ。険悪も買って出る最高の真名だ。

「おい、童……」

またもや、今回二度目の目を誤った。

彼の描く方程式の中に、『それ』が入っていた。

「一体、どどういう事合いだ?!」

そこには、

○

絵字通り、床かで観たことのある記号化伝承線だ

「床窓 碇です」

膝をはたいて、立ち上がる。

カラクレリ13(後書き)

ゴシゴシ

カラクラリ14

土曜日（伎）

「ちょっと待って、」

声が裏返り、似つかすなら、シャープな蜥蜴の鳴き声の相対的キ―で申してしまった。

「？」

優しく児童をどけて、かがんで片膝つかして、砂浜砂漠の模様、すなわち、幾何学的魔法陣を凝視した。

「全く持って、神妙だ…」

別に言葉を選んだわけではない。ただただ、考えよりも視覚的理解も、まかり通り差し置いて、その言葉が口からフライングした、しました。

「？なにがそんなに、可笑しいのですか？もしかして、順応に適應して、『あなたは天才です。』とか、言ってくれたりするんですか？、言ってくれると、うれしいな」

この子供、かなり自信過剰だな。逆にほめ殺したくなったり、ならなかつたりするな。僕の率直な感想だ。

「あなたは天才よ。」

と、床窓と言う少年の背後に、丸みがあった影がそびえる。
チクイチ答えを耕すコトはしなくてよろしいのだが。頭腹だ。

非違する事なく。彼女は坊やの肩に女性らしい手を添え乗せる。

「天才なんて居ませんよ。天災しか起きません。」

なんて、聞き取るに、青息吐息しそうな語源を扱うのだろう。と、
僕は考え思った。

「算数だけではなく。お言葉までお上手なのね…」

考えるに値しない、いささか些細な開口に、票を称える。のは、頭
腹の方だ。

「所で何を自主学习なさっていたの？書き記されたのは、数字の様
だから憶測で推測に過ぎないのだけれど。」

数分間に錯覚してしまう。数秒間の間が瞬く。

「落書きね」

逡巡と駆けめぐるのは、追い風の方だった。

カラクラリ15

土曜日（畿）

「見え透いた茶番ね」

茶番を連想させる語句は、お茶会や茶道である。

「僕ですか。そうかもしれない。そうであつて欲しかった。などと、言いたい。」「考え寄りも、現実の方が異常で異質で忌まわしいですよ。」「落書きですよ。観ての通り」「なんの変哲もなく、変異、変性もない、無邪気なアート」「と、言いたい、でも、これは何か、肯定する何か、の理論、でいて、なにかを証明しているのです」「かなり、荒唐無稽でデタラメな言い草に聞こえるが、床窓少年が言う、それはそれは、意味ありげな物言いに聞こえてしょうがない。

「長々と口動かしていたけれど、一言言つて、床窓少年は、単なる掛け算ライターって、所なのね。驚きだわ」

天才算数少年 床窓

昔の僕は、余りにも天才過ぎて仕方なかった。友達は0、幾たび、その才有る僕が知らぬ間に、蹴散らしていたからである。

言葉は好きではない。

答えが出せないからだ。

言葉も答えに出せる方法は、知っていた。簡単に居て単調な方法だ。つまり、要するに、要になる『数字』を基点にすればいいのだ。ひと語句、ひと語句を数値に換え、後は、計算するだけなのだから…

違った。

誤ったのだ。

それに気づいた僕、もう手遅れだった。
親も殆ど、僕に対して、構わなくなり、生活最低限の事しかしない。

目を観れば分かる、虚ろだ。

何処までも深く水深5000000メートルは有りそうだ。

洗脳や催眠術と同じ、言葉は気持ち？

言葉を数値に換えてしまえば。気持ちも数値化でき、人も機械的な
対応しかしなくなる。

これは、ただの仮説だ。

「

カラクラリ16

土曜日(稀)

あらすじ

ふと気づくと、よく理解できない。話の流れになっているので、虎視眈々と、軽く説明しようと思う。

まずはじめに、主人公 観手が一冊の本を読む。

その本に書かれている。物に興味を抱く。操られるようにして、公園へと向かい。

そこで、運命的な出会いをする。

幾月だ。

その後、公園のベンチに頭を打ちつける主人公。

お昼も近づき、子供らが家に帰る中。

一人、砂浜で留まっている子供がいるではないか。

子供と言うより少年だ。

なんだか、陰気な雰囲気を感じ出し出している彼に、

僕は思い切って、近づき、話す。

少年からは、とんでもない事を口ずさむばかり、

そこへ、幾月。

そこから先は、少年のエピソードが展開されたのだ。

かと言って、僕は呆然と棒立ちしているだけである。

「所で、床窓、僕と友達にならないか？」

「え？」

何となく分かる、僕だってそうだったように、少年もまた。神様が差し尽かした歯車を彼に提供したんだと。

一人、孤独の気持ちは痛みさえも生ぬるく感じてしまうほど。分かる。

恐らく、そうなんだ。やっと分かった。

ここにいる。彼ら。

詳しくは、床窓 碇や頭腹 幾月は、ずっと、一人だったんだ。

今ならはかる、今現在、登場している彼らは、寂しい生き方をしていたんだと。

「君もだ。幾月。」

下の名前を呼び捨てでもって構わないだろ？

「止めて、くれないかしら？」

「拒否る」

微々に、烏澁がましい顔をしたが観なかったことにすれば丸く収まる。

僕、観手は、

「そして、少年。お前は、カタカナでイカリだ」

命令を差し伸べる。

最後に、僕は決めた。

「上手くいつている奴らに、一泡ふかそうぜ」

それから始まる。

僕らの地獄路。

常識に立ち向かう。新たな物語

軽くラリる

カラクラリってな。

カラクラリ17

土曜日（祁）

平民で凡人な平凡な毎日が終わりを告げた。

告げるという。表現技法が狂っているな。用は、宣言したのだ。

「さて、ここから何をし始めようか。」

静寂と混沌に包まれた、沈黙を自ら打破した僕、観手。

「何を始めようかって、観手さんは、本格的に計画を立てて、発言するお人ではないのですか？…がつくりです」

物静かな表情を絶やすことのない。自称算数得意少年は、僕観手の『常識に立ち向かう』的な宣言を心待ちかに期待していたが、ノーブランな事につくりした様子だ。見て取れる。

「その中には、私も入っているの？」

意外と冷酷な視線を送るのは、先ほど、顔と名前を知った幾月と名乗る小娘だ。

「無論勿論、入会済みだ」

正午は、とっくに過ぎている。そろそろ腹の虫が悲鳴と奇声に分けて、泣き出すであろう。

ま、そんな事はないと思うけど。

「仕方ないわね」

おっと、あっさりと同意してくれるのかよ、驚きだ。

「所で、観手さん。僕は結構頭が利口から言っときます。もしも、万が一、僕らのその非道な同好会で間違いが起きても、全部、あなたが責任を取ってくれますか？」

少年イカリは、この会で何かが起こってしまうと悟ったご様子だ。

「心配ないぞ。」

即答と決意をはらんでそう告げる。

「その自信はどこから、訪れるのですか？」

想定範囲というか。繰り出される言葉を先読みしていたというか。その答えは、もう決まっている。

「この忌まわしく目敏い説明書さ」

自分でも、その本をどこからだしたか分からない、けれど、演出にはもってこいの、早出しだ。

間違えると命に関わる。

「あ、あの〜、幾月さんでしたっけ？」

だっけ？じゃね〜よちゃんと覚えとけ！

これだから小学生は、記憶力に乏しく抜かるから小学生は。

と僕観手は、思った。

「？」

首から下の全身を固定したまま、首をひねり、イカリを直視する。

そつだ！その調子だ！話を逸らせ！イカリ！

「僕が描く式には、何らかの意味があり、それ自体を人が予言と、高く評価していたけど、幾月さんが言う。『落書き』ってのは、ちよつと、げせないのですよ」

自己調整しろ！と言うのは、よく耳にたかができる話で、彼もまた、限度を知らない唯我独尊主義者らしいな。小学生の癖に、生意気だ。

と、思わせぶる僕

「私に訂正を求めるの？」

「

言わんこつちやない。

彼女ちよつと起こってるぜ。ウゲへ。僕は、通りすがりの傍観者さ。括弧が滑稽な光景になってるぜ。

と、無言の僕。

「素直にいったら、縦に頷きます」

「それは素直に言っていないと、思いますが？」

何だよ。この展開。バトルでもおっぱじめようか。とか言い出しそ
うだな。

「だって僕。天才なんだもん。」

ぐは。

「なんなら、私は、観手さんが大好きです」

お、おい、まで！

狂ってるって、お前ら！

「そこまで言いますかで、なら。観手さんは、使える下部と愛、ど
っち取るか。

バトルでもおっぱじめようじゃないですか！」

「良いところよ。望むわ。」

おかしなおかしな物語り…

次回

こんな僕でも

ついてくる人

いるのかよ。

カラクラリ19

土曜日（汽）

大好き？今大好きと言ったか？は、微笑ましく愛くるしいな。そんな弱酸性で居て、万弱な音は生まれて初めて初体験だ。

まあ良しとするか。好意の行為は受けとっとくべきだ、この場合は、発言か…

視線右 左へ

なるほど、下部か…使えるな。

手下として、骨の髄まで下劣に食べ食べしてやる。

はは、まるで、

使いたい駒が手元に上等万端とそろっているようだぜ

「別に勘違いしないで欲しいわ。私は、この少年を天才児と認めるくらいなら、好意の矛先をあなたに向けるって、言うだけの話なのよ」

理解にもがき苦しみたくなる言葉数だ。

「容易に勘違いしないでください。僕は、あなたの下部になることを望んでるわけでは、ないのでですよ。ただ、気まぐれで…」

と少年イカリ

「わかった。わかったって、とりあえず、話を進めよう。勿論、誰を選ぶなんかはしない。できるだけ、平等に均衡はかるのを前提として、優劣を決めたり、能力的差額を差別らないから。」
と説得。

「そこまで、口走るのなら、忘れたことにするわ」

「僕も、同じ決議で」

あっさりと、言いやがる、此奴等、なんとなく、語源戦争したかっただけじゃねーかよ！

「と、脱線事故と、話が歪みまくったけど、第一言に、僕らの組織的、名前が必要なんだ！いや、重要」

「自分で言っつて、恥ずかしくない？」

「ごもつともですね」

僕観手は、浅はかな知恵と知識しか所有していないのだ。

次回

躊躇朦朧会

カラクラリ20

土曜日(季)

皆さんは気づいてないであろう。前者でなくとも、気にとめるような事はしていないであろう。

の土曜日の後に続く、丸みの有る括弧の一字を…

前の話と、その前の話がかぶって、いたのだと、皆さんは知らないであろう。

今気づいたであろう。

そう、作者自身が変わえ忘れていたから、皆さんも分からないはず、と解釈拝見して欲しい。

「躊躇朦朧会でどうだい？」

とっさはとっさ、ふと、脳内をよぎる語句を紡いだ新熟語だ。

ここで一つ、言うのなら、ふと、思いつくモノは何らかの意味が存在し、有る意味、意味の有る事柄なのだよ。

無意識な意図、あるいは、もしかしたら、誰だって、予言者なのかもしれない。

「漢字すると、拙劣で…。センスが事足りてないわ。」

「ちゅうちょもつらつって、どちらとも、半端ではないですか。コ
しだから日本語は難しくてかなわぬ。」

小学生まで、けなされるとは。僕も捨てたもんじゃないな。

「こほん。」

声帯の調整

場の間合い

体勢静態

「つまり、要するに、多分おそらく何となく、大抵大概、は、コレ
で決まりだ」

「はい？」

応答したのは、イカリの方で、幾月さんは無関心だ。

「だから、僕がいたいのは、ほかでもなく、この会名義で決まり
つてこと」

優しくお手柔らかに、話す。

「あ、そっちですか」

ん？

小学生は、的外れな答案を繰り出す。

「イカリ君、確認取らせて、お前は何か聞いたかった？のかい？」

一応念のため万が一にだ。

「活動内容が気になるわ」

おっと、今度は、こっちからかよ。

思わせぶりのふりは達人だな。

「全地球上に、揺さぶりをかけましようーってのは、どうです？」

名人か、こいつらのリリースアンプス回しは、

「規模が盛大だな。却下を下ろすしかな…」「いいんじゃない（肯定の意）」「いな」

この二人、もはや、キョウダイ的な繋がりか、絶対あるだろ。

僕観手はついて、いけません。

こっして、お腹は空く…

↓

カラクラリ21

土曜日（鱈）

特定の間人は、好き勝手やって、来たから、もう、何が起きてても文句は言えないだろ。

「もう、腹が減ったから、帰る」

告げ口を叩いて、帰ることにした、だって、お腹がペコペコ何ですよ。

「待つて、ください。観手さん。次の集会の連絡の共有のために、メールアドレスをコピーして交換しましょう。」

言うまでもなく、イカリの助言。

だがしかし、その言葉にうむと頷けるハズがない。

「悪い。携帯電話持ってないんだ。」

との理由があるからだ。

言い終わって、ふと、気づく。

「ん？小学生のくせに、携帯電話なんか、所持しているのかよ」

客観的に観ても、俄に信じがたい。小学生がポチる機器を常時所持している。このイカリという少年が、

「え！？高校生で携帯を持っていないのが可笑しいのではないのですか？」

「どうでも良いけど、さっきから立ち話して、足がしびれるぜ。」

「馬鹿を言うなよ。こっちはこっちの理由があつて、…まゝなんだ。よくある話さ」

5度携帯電話をぶつ壊されて、もう、自分から必要ありませんと、家族に、抗議したことなど、最も、よく言われる口が裂けても言えない、だ。

詮索心が沸くから、ガキは嫌いなんだ。

とでも、言つべきか…

余計だな。

「そうですね、なら、毎日、公園に滞在しておきますので、いつでも来てください。」

滞在の意味をこの子は、果たして、知っているのだろうか…

「幾月さんは、どうします？」

イカリが訪ね問い掛けている。

正直な所、幾月がこんな、馬鹿っぽい集会につき合うような面持ち柄ではない事ぐらいは察している、けれど、この会から今までの出来合いまで、どうして、居続けているのかは、僕には理解ができない。

ちよつとさつき、口ずさんでていた。証言は好意ではなく、厚意であつたはずだ。

「私は、…、そうね、暇なときに、イカリの方から、電話かメールを送ってくれたら、相応対処するわ。」

と、受信送信たぐいのやり取りを行う。イカリと幾月さん。

僕が思うに、幾月がイカリと呼ぶ声は、なんとほのめかそうか、違和感が音程のトーンか、何かが違うような気がする。

「登録完了です。」

「では、お開きという形で、さようならです。観手さん」

興も冷め、帰宅路を踏みしめ始めていた僕に、さようならとご丁寧
に、伝えるイカリ。

「律儀な奴だな。話された分、こっちも言葉を返すぜ。…イカリと
幾月さん。お昼ですがさようなら。」

顔は半観の状態だ。無論、足は痺れ、がくがくでいで、決まらない
が、手の甲を軽く上げ、揺する。

次回の話をするのなら、顔も忘れたあいつが現れる。

カラクラリ22

土曜日（帰）

言うまでもなく、文字通り帰り道だった。

民間公園と言っても、それほど大規模でもなく、公園と表現するより、空き地と言った方が過言ではないであろう。

帰宅と罵る単語は、僕からしてみれば、一段階下層の単語にしか聞こえない。匹敵しよう言語道断を口にするのならハイパー帰宅とでも言った方が良いであろう。

歩くのが好きなのか、それとも、家に蛙が好きなのか、イマイチよく理解していない。

恐らく、両方有る。

ふつう気ままに、歩くのと、自転車や自動車などで、帰るのとは、両者ともつまらない。と、断言する。

帰り道と言つ名の舞台で、徒歩で歩くと言つ演技ををするのだ。周りに見える、景色は演出を増大させ。

とつても素敵だ。

…

…

：

はて？、前方に人影が見えるが。

一体、誰だろう？

時は昼過ぎ、若干住居に囲まれた、道筋に、人がいる、歩いて来る。

どこかで観たこと、有りそうでなさそうで、頭の中が淀めく、前方不注意で衝突しないように最新でいて細心の注意を払う。

だがしかし、想像したであろう、その結果を大いに覆された。

外見からして、同い年か、それ以上な彼は、通り過ぎ、何処かへ消えてしまうのであろうと覚悟していた僕を翻した。

すれ違って、僕の知らない遠い遠い遙か彼方へ過ぎ去ってしまうのであろうと覚悟した僕を嘲笑うかのように、立ちふさぐ。

対局する僕合わせて二人は、沈着と冷静だ。

明らかに、彼の顔色はおかしい。

逡巡とためらう僕。

声を掛けるべきなのか、シカトして無視するべきなのか、選択に困る。

躊躇朦朧としている僕は、はたから見れば、挙動不審な変なお人にまれてしまう、

それだけは免れたいが、額にカツコ良く怪我をしている時点で、疑問に問われる。

確信はないが、まず、膝がピザだ。

ジユクジユクしている。

いや、大丈夫だ。しっかり包帯をしている。

言葉を並べれば、並べるほどワイルドな容姿だな。

数分は経過したか、もう、右往左往するのは止めよう。

「こんにちは」

顔色が体調不良な彼に、一言掛ける。

…

…

「俺の事、知っているか？」

と返ってきた。

俺？

何か引つかかるような。小首を傾げる
そぶりをする。

「こんにちは」

試しに、もう一度挨拶、

「知らないのかよ。俺だよ、俺」

「こんにちは」

「ま、いいか、：久しぶりだな。観手、今回ばかりは、どうにもならなかった、謝罪しても許されるはずはないよな。だって、結構、悪行をお前に擦り付けていたんだから、良いんだよだって、お前のためにやってきたことだからな、自己犠牲も良いところだ。なんだったら、俺の代わりに、かわってもいいんじゃないか。立場を。いろいろ、ほざくけど、要するに、何がしたいのかというのなら、

それは、

さようならだ」

僕の視界が、無に変わったのは、言い終えた直後だった。

「

カラクラリ23(終)

闇がほとばしる。

何もかもが無だ。

逆に言えば暇だ。

ここで昔話をしよう。

昔こんな奴がいた。

ある友達の家に遊びに行くことになった。

その友達が変わった趣味をお持ちだった。

お菓子の箱を収集する趣味だ。

僕は、疑問に思い訪ねた。

…訪ねるが如し、次のような語呂を放つ…

本当は紙切れだけど、好きな物は何事にも代え難い。

正直泣いた。

あまりにも美しすぎて、余りにも、純粹で無垢なその人事に、感動した。

その名言とも言える、超絶言語は、僕の心の蟠っていた何かを、

なんつーか。溶かすような感じに、浄化したのだ。

今なら、しっくり、思い出せる。あれは、楔瓦だ。

ずっと、僕の友達は楔瓦立っただ。

ああ、もう一度やり直したい。

でも、手遅れ、手の施しようがない。

完全に、僕の負けだ。

……

…

エンドユーザ

空カラクラリ

日曜日

「すまない。なんて言っていたかを、聞き取れなかったわ」

「だからですね。観手さんが消えたんですよ、物質から根こそぎ」

「困ったことに、なりましたわ」

もちろん、ミルクティーは欠かさない。

「何が彼を襲ったのでしょうか？」

公園には、誰もいない。彼らを除いては、

「ま、そのうち、帰ってくるでしょうよ、気長に待ちましよう」

空は、青。透き通る空と、澄んだ空気が風に乗る。

常識との戦いは、始まったばかりだ。早々に、問題外な事が起きうるのも想定内だ。

彼、彼は、観手だ。観手の血痕が滴るベンチ。乾いているが確かに、彼はここにいた。私達も1日だけの出会いだったが。

よく覚えている。

空カラクラリ2

草原

少女が立っていた、年はイカリくらいであろう。
小学生くらいの女の子、別にやましい意味はない。だってそこに…
視界に映る草原には、彼女しかないのだから、嫌でも願ったり、
思ったりするのだ…

ここは、どこ？と…

八方、どこ観ても、草原が広がり、太陽がないのに、青い空と穏やかで優しい風が吹き渡る…それだけの空間だ。

今更ながら、状況把握をしていないわけではない。ここには、何もなく。前方に立ち尽くす彼女だけが頼りだと、誰もが思うであろう。

「うへへ」

腹の音だ。口には、していない。

「あの一、そこのお嬢さん？」

無駄な物は一切着飾ってない。ワンピース姿だ。

「何だ？」

と少女。なんだはこっちだ。
幻滅させられる口調は、言葉通り幻滅させるれた。

返す言葉を選ぶ僕。

「初めに、言わせて、定番過ぎるけど、生まれ始めて、口にするんだ。」

「だから、どうした？」

僕、少女と続き、言葉を紡ぐ。

「ここは、どこですか？」

僕は、アハハと頭の渦に、手を添える。

「観ての通りだ。それしか言えん。」

少女。何だろうか、意外性が有ってしっくりくると言っより、もうなれているキャラって感じた。

あ、そうか。イカリと同類の匂いがするからか。全く、最近の小学生は頭が良すぎて、対応に困る。それと比例して、眼のやり場には困らないが…

無邪気で人なっこい方が退くからな。対人恐怖症と言っのであろう。

「少しばかり若干ちよっと、ぶれた言葉を言っけど、ここは、時空の狭間？それとも、元凶世界？」

ごもつともな、質問であろう。現に、もう現実味の無い現状が降りかかっているからな。

「どちら共でもない。…けど、お前の事は、知っている。」

知っている？可笑しく笑えない発言だ。良い用にとれば、話が迅速で助かる…と、険悪にとらえれば、どこからどこまで一部始終まるまる全部知られている用な冷や汗級のプライバシー剥奪疑惑…が述べられる。

「僕、携帯持ってないんだ。ここ、携帯とか繋がる？」

バカな発言だ。つい、険悪感を整えるべくの口車にしても、馬鹿すぎる。

「繋がる。よ」

よ？繋がるのか、

「何がどうして、どうやって繋がるの？そこんところ、詳しく知りたいな」

「馬鹿かお前は、分かるはずが無いだろ！」

無意識にその言葉を聞きたかったのか、ホットした。

「日本語で話せ」

と言ってみる、

「ここ何も無いではないか。」

正論だ。目的地もなく途方に、右足左足を交互に動かす連続技しか出来ない。

「どれ、飛んで観ろ。」

案を奏す。

「飛ぶ？だと」

「飛脚の距離を計りたい。置くまでこれは、何となくだ。裏腹はな
い」

暇だからだ。意味は無い

「お前は、私に何を求めているのだ？」

「脚力測定」

僕は、お前の事知らない分、身体能力位は代償として、知っていき
たいの案だ。

「そうかなるほど、私をなめていると言うのか。ふむ。分かった。
飛ぶぞ」

飛べ飛べ、所詮小学生の飛距離なんて、1メートルが精一杯だろうよ。

「おりゃ」

「ほー凄い。三メートルはない飛んだな。助走込みで」

両手を使って拍手。これは見事だ。

「次はお前だ。飛んで観ろ」

見事に選手交代を図る。

「あーすまない。おれ、額から出血したんで、貧血気味なんだ」

確認のため、額に手をやるがあら不思議と綺麗に完治しているではないか。おまけに膝がピザっていた膝もズボンごと、修正済みだ。

故障してるんで、ご遠慮願いたい。の言い訳は、虚しく、効果を著しくしてしまうこの世界のルールを思い知った。

「ピザパン食ってないから無理」

換え摘んで、二言目を言う。

「ピザパンくらい食っとけよ」

？、つまり、今の理由は、通るのか？いや、通ったのか。

「ピザパン持っているかい？おれ、腹がペコペコなんだ、持っているのなら、飛んでやらないこともないが…」

思い出せば、楔瓦に合った時には、極限状態の空腹感に満たされていたことを考えれば、それほど、腹は減っていない感じだ。

「無いことは無いが、空気味の無色透明質量ゼロのアンパンマンくらいしかないが…」

それ、空気と同類の主成分しかないように聞こえるのだが…

何処までも広がる草原地帯

「

空カラクラリ4

平原

平原地帯での足にかかる負荷はどれほどの物か…考えるに値しない。

…考えてしまうのは、僕がバカなのか、おれがアホなのか、きっとどちらかであろう。

ああ、何時間経過したので有ろうか、出口の見えないこの土地は、どこまで永遠何だろうか。

「なー、お前。名前はなんと言っ？」

言葉数もつまり、話す話題さえも尽きてしまった僕は、暗黙の了解で名前は聞かないことにしていたが、もう限界だった。

「名前は、言えない」

そうなのだろうとは、思った。

「…理由とかあるのか？」

無いと言っだろう。

「わからない」

わからない…か、両者にしても、僕の思っていた答えと同じ。少女には、出口が分かっているんだ。

「教えないのは、ひどいこととは思わないか？僕にも教えてよ名前」
名前を知れば最後、どうしても僕のシナリオの歯車に、この少女が絡んで来るであろう。
そんな事はどうでもいいのだが。

「お前が悪いんだ」

言われるがままに、僕が悪いんだすべての現況において、説明書、携帯電話、旧友、幼なじみ、数学少年、孤立少女。

僕が、恨んだすべてだった。

。始まりは、海、浜辺の壊れたアナログ時計。小六の僕は、枯れた好奇心で時計を手にした。
頭が破裂しそうだった。悪夢としか言えない。小学生より学力が劣る僕。友人にいじめられる僕。幼なじみに見向きもされない死んでしまえばかりに送る視線。少女までに、馬鹿にされ。携帯電話は、使えない。

時計は、先取りしてくれた。

僕は、そこで禁じ手を使った。

説明書は、世界の裏技が詰まったマスターアイテム。

僕は、願った。誰もいなかったとにしよう...

それが叶った、けれど、一つ未練を残していたようだ。

「お前は、俺だ。」

形や姿を変えようと、そんなの時間稼ぎに過ぎない結局、こういう結末に繋がるんだよ。

「再帰は不能だ」

もう、いい誰が必要で誰が要らない人間かは、知り尽くした。あとはお前だけだ。

「何を言っている？」

それはこっちの台詞だ。はっきり言ってみ苦しいぞ。

「お前が名前を覚えてくれなかった時点で、なんだか、全ての事柄に踏ん切りが付いた」

うつむく少女。

「お前は存在しない。ここも存在しない。もっと、言うなれば、今こうしていると言う認識自体も幻。追加すると、お前は誰でもない。俺の未練だ。消えろ」

消えるはずもない。まだこいつの名前を言わさなくてはいけないからな。

「お前は、誰だ？なぜ、どうして、ここに留まる？俺は死にたいん

だ！常識なんかには勝てるはずもない！未来を知っているからだ！」

神でもなつた気分だぜ。最初から、僕は真つ暗闇の孤独な落ちこぼれさ。前世があるのなら、前世からそうだった。辛いことは、生きること！それ以上の言葉は見あたらない。

「お前こそ、一番の幸せモノだな、それだけ怒鳴れる元気が有るのだから……」

少女は、言ったとおり誰でもなかった。

「

空カラクラリ5

大地。

とても大らかな香りが鼻腔の感覚期間をくすぐる。要するに、土の薫りってこと。

あけましておめでとう。僕は生まれ変わったのだ。大地と同等の位置に面し、大の字で仰向け、さらに足はかなり、虐めた。もう一生使用制限（高）くらい虐めまくった。

幸い長ズボンを装備していたとおかげで生い茂る稲によく似た雑草で擦り切れることはなかった。

僕は、毎日年中無休と言って善いほど、長ズボンを何となく履いていたのはこの時の為の調整期間だったと、自惚れ紛れに笑う。

「あつは、は、は、は」

世間の細波も返り討ちだ。と肩を並べ計れるくらい。爆笑する。

抱腹絶倒。のたうち回る。

横腹這い縦腹這い。

「き、決めが悪い……」

推定小学生にまで、寄生虫扱いな視線を送られる僕は、もう、壊れてしまったのであろう。

しかし、これは絶好な機会だ。

この少女は、誰だか知らないが、もう他人だ。他人イコール常識人種。

評価が低ければ、低いほど高評価！

ここで止まり、滞り、停滞しすれば…

やばい奴らイコール躊躇朦朧会の会員に、顔向け出来ない。リーダーとして、長として。

そこで僕は、

「今のおれ、狂ってる？」

冷酷をすっ飛ばして、ドジ眼で哀れ単体運動会を繰り返す僕に、眼差しを送るのだ。

大丈夫、ベンチに頭を叩きつけるより遥かに難易度は低い。この勝負有利なのは僕だ。

何と戦ってるって？

無論勿論、常識とさ。

さっきの俯瞰な自嘲は、ドロヘ言ったかって？それは、明後日の方に向にさ。

「狂っている人を視聴していると、なんだか、満たされるようで慣れ

ない。お前は、人としての叛逆者なのか？」

少女、どの角度から聞いても、小学生と断定出来ない言葉の集合体をぶつける。

「はい？お嬢様、なんと、おっしゃったのですか？」

僕は、単体運動会に飽きて、立ち上がり気味に、片手を地べたに、添える。

「だから、醜い狼狽は止めると、言いたいんだ！恥を知れ！」

このお嬢さんも何処のお国から来来来られたのでしょうか？言葉並べが歴然として、厄介だ。

「お前こそ、何語を用途爛々と口走ってんだよ！！素直になりたまえ！異国人民！」

僕一人、狂気に覚醒してしまい奇怪なステップを刻む。

「異国人民だと？抜かせば急かす花咲す。私の全てはこの世界一つだ！

それ以外は、何もない！

お前の事は、ずっと前に、お前から聞いたただけだ！」

棒立ちと唾然が交差する。

「私はな！お前が生きたずっと、先の未来で死んだ！これは事実で、

お前は、私を助けた！。」

時間軸転送類の話か？

「私は、私は、……」

？

？

「外の世界をもう一度観てみたい……」

「

空カラクラリ6

現世

元の世界に戻る、簡単な過ぎる行事。

単純に、出口を探せば見つかるのと同じ。

簡単で単純。けれど、時間はとてつもなくかなり掛かった。時間制限のなしだからと言って、何億時間もさまよえる場所ではなかった。

精神の方が先に駄目になってしまう。

時間はあっても、自分には勝てない。

と言つものだ。

それより、元居た世界の世界観が一層、珍奇な風土に思ってしまうのは、僕からしての考え水準がぶれてしまったからなのだろうか。

まるで、古都な近代だ。

眩く物静かな街並み、樹林が少なく。コンクリの匂い、動くタングステンの塊、軽自動車。鳥類の無駄な鳴き声、微量。

歩道は堅く、うつ伏せ寝なんて到底夢話。
建物は住居ばかりに、人しか居なそうだ。

「ここが私が生前世界の基礎か」

現に少女が未来人だとしても、過去を基礎とは絶対に言わないだろ。これは未来を透視できない僕だけの違和感立ったりするののか？

「へんぴな町々で悪かったな（！）」

怒鳴ってなどいない。発声の調節だ。

「先ず始めに言っておく。ここでは、僕は常識ぶっている一庶民だ。平民でも凡人でも言うが善い。だ、け、ど、心はもうすでに手の施しようがないほど、悪漢奇人だ。怖くなったら、元居た世界に帰れ
「！」

告げ口たたいて釘を刺す。

「下らん告げ口叩きおって、脅しにもならないわよ」

威勢は良好だ。問題なさそうだ。

「躊躇朦朧会会場。公園にこうか？」

そついや〜こいつの名前、まだ決めてなかったな。

「お前の名前を率直に即決する

お前は今日からユリ子だ。」

有無は言わせない。

「わたかった」

とユリ子。

話の分かるやつで助かる。

「観手、質問があるが、一度 家に帰ったらどうだ？疲れているだろっし」

なんだその気まわしは？

「それもそうか、…：そうだな。」

よしと頷くユリ子と僕は、一旦自宅へ帰宅する方向に場面を移すことにした。

「

カラクラリ23

家

「アハ母は、死ねー死ねよ」

僕はユリ子と言う少女をまな板で撲殺するのだ。

ジェル状の血液はあたり一面に飛び散り、内臓やら人骨やらが剥き出しになるまで叩いたのだ。

一度はやってみたかったこと。問答無用で人を殺すこと。一方的に暴力をふるいたい。

始めっから、こうしとけば良かったんだ。

常識に打ち勝つなんて無理だから、せめて生きている内にだれでもいいから、思う存分、虐めたかった。

夢は叶う。かなったさ。

今僕は一番異常だ。人の血が若干、みずみずしくどろっどろっとしているなんて、初体験だ。

これからどうする？

答えは、勿論、公園へあの公園行くのだ。

「さっさと、行かないと、待っている」

日曜日、今日はとってもいい天気。

「

カラクラリ24

公園

血塗れで道を歩く、観手。

街々の色とりどりの配置物を拝見しながら、闊歩する。

酷くイかれた姿なのだが、あの少女は殺さなくてはならなかったのだ。

理由は、あれを観られたから、動機はあれが見つかったから。

それ以外の理由を探すのが難しい。

なに、あの少女は自己再生できる。

その設定は、おれが決めた。

ずっと、未来のおれが…

出なければ、遙か遠い未来で死んでいることになるからな。

「可笑しすぎて、肝が抜けそうだ…」

周りの人間は、何食わぬ顔で通り過ぎて行く。

どうせ、目に見えるほとんどの人々は、普通に暮らし、普通に幸せ何だろ。

おれは、少し異常なだけ、ほぼ人間だ。

当たり前が当たり前前に出来ない俺達だ。

俺たちって事は、ほかにも仲間が入るのか？と読者側から疑問符を投げつけられそうだが

この話の濁流から描くに、その通りだ。

と答えてやる。この物語に登場する人物はみんな異常者だ。これだけイッておく、

それにしても、主人公を演じるのも疲れてくる。早めに、楔瓦の柵から解放されたい。

ぼくは、人に生まれた。

だからこそ、自由を何処までも求めたい。何から何まで、思い通りにしたい。

だからおれは、役者全てを完全に消し去る。

公園はいつもと変わらない…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7033w/>

カラクラリ。夕暮れ暮れる

2011年11月16日17時33分発行